

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 5 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370589

研究課題名(和文) 言語習慣と当事者評価から考える日本の外国人居住者の日本語習得研究

研究課題名(英文) A Study of Japanese acquisition among foreign residents in Japan through an analysis of language habits and self-evaluation of language users

研究代表者

高 民定 (Ko, Minjeong)

千葉大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：30400807

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：社会のグローバル化と国境を移動する人々の増加に伴い、社会をめぐる言語環境は益々多様化し、複雑になってきている。日本に居住する外国人の言語使用意識もこうした移動の環境とともに変化しつつある。本研究は異なる言語環境をもつ外国人移住者の日本語使用意識と習得問題を明らかにすることを目的とする。外国人居住者の様々な場面における言語使用と評価に関するアンケート調査を行い、また言語バイオグラフィー調査で報告される彼らの共時的・通時的語りを言語管理の視点から分析することで、異なる言語環境をもつ日本の外国人居住者の日本語使用や習得に対する意識、またその変化の方向性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：As globalization in the society advances, the language environment in Japan has become more and more diverse, reflected by the increasing number of communicative situations in languages other than Japanese. The aim of this study is to examine problems of language awareness and language acquisition among foreign residents in Japan due to the change of language environment in their home country and in the host country. The data was collected through a survey based on a questionnaire was conducted in order to find out how foreign residents in Japan language use and evaluate languages in various types of situation and a language biography investigation, from which synchronic and diachronic narratives in their reports were abstracted for analysis. The findings suggest that as a clue for the understanding of foreign residents in Japan language acquisition problem, their language habits and the diachronic perspective of their language biography should be taken into consideration.

研究分野：日本語教育

キーワード：外国人居住者 言語環境 日本語使用意識 言語習慣 当事者評価 日本語習得

1. 研究開始当初の背景

社会のグローバル化に伴い、日本でも言語環境は多様化し、日本語以外の言語使用場面も増えている。それにともない、外国人居住者の言語使用や日本語習得に対する評価も変わってきているように思われる。特に、外国人居住者自身が言語使用や言語問題をどのようにとらえ、評価しているかを当事者視点から分析することの重要性が指摘されている。多文化共生のための最近の日本語教育の取り組みやヨーロッパの複言語主義を取り入れた言語教育の試み、また言語教育における母語話者の評価研究などは、こうした背景と流れを反映した取り組みであるといえよう。しかし、当事者視点をただ反映するだけではなく、当事者による言語使用と言語問題を当事者の内省を基にプロセス的に分析する言語管理の研究はまだ少ないのが現状である。多言語環境で暮らす外国人居住者の日本語を含む言語使用を理解するためには彼らのこれまでの言語環境ともに現在の言語使用パターン（言語習慣）の実態を把握する必要がある。と同時に日本語を含む言語使用に対し、外国人居住者自身がどのように評価し、調整しているかについても明らかにする必要がある。そこで、本研究では外国人居住者の言語習慣の実態を捉えながら、日本語使用と習得問題を当事者評価と言語管理(Language Management)の観点から考察することにより、多言語環境で暮らす外国人居住者の日本語使用に対する評価の実態を明らかにすることを目的とする。またそれをもとに当事者視点から考える日本語教育や日本語習得への示唆を試みる。

2. 研究の目的

本研究は日本の外国人居住者の日本語使用と習得問題を、「言語習慣（言語使用パターン）」と「評価」に焦点を当て、当事者視点と言語管理の観点から調査分析することでその実態を明らかにすることを目的としている。そのためには調査の対象と範囲をどのように

選定するかが重要である。本研究では、これまでの研究から日本の外国人居住者は出身地域での言語習得と現在の言語使用の状況をもとに以下の3つの言語使用グループに分けられると考えており、それぞれのグ

ループにおける言語習慣と日本語使用、言語習得の諸相を明らかにすることを目的とした。

①出身地域では単言語中心だが、日本では母語と日本語の2言語を主として使用するグループA

②出身地域でも多言語使用者（3言語以上）で、日本でも主として多言語を使用するグループB

③出身地域では単言語中心だが、日本では主に英語を含む多言語を使用するグループC

3. 研究の方法

上記の研究対象と課題について、本研究では連携研究者の村岡氏との共同研究において、まず（1）外国人居住者の来日後の日本語使用に対する意識と習得に対する自己評価について、アンケート調査を行った。そこでは、日本での滞在期間の違いは、日本語能力の自己評価に基づくグループ間で、どのような言語使用意識の相違に関連しているかを検証した。また、出身地域での言語習得と現在の言語使用状況に基づく言語使用グループ間では、どのような日本語使用意識と習得に対する評価の特徴が見られるかを明らかにした。次に、（2）言語習慣や言語使用に関する意識などの社会言語学要因についてインタビュー調査を行い、言語使用グループの日本における言語習慣に対する社会言語学プロフィールを作成した。具体的には、「言語バイオグラフィー(language biography)調査を行い、言語習慣を調査した。そのうえ、外国人居住者の言語習慣（言語使用パターン）と当事者評価、日本語習得との関連について事例分析を行うと同時に、比較の視点で、3言語使用グループ間の特徴を比較分析した。また（3）調査協力者の社会言語学プロフィールの作成

から得られた収録可能な言語使用場面を特定し、実際の談話データを収集し、日本語使用の分析を行った。

4. 研究成果

(1) 本調査ではアンケートの意識調査をもとに、外国人居住者のうちとくに留学生の回答について言語使用意識、とりわけ日本語使用意識や日本語能力の習得について、自己評価的な側面から分析・考察を試みた。その結果、①日本語能力の中評価グループと高評価グループの言語使用意識については、自己評価の程度に関係なく、どのグループも言語使用と日本語規範に対する意識が高く、調整と習得、自己規範に対しては意識が低い傾向にあり、言語管理のパターンが類似していることが明らかになった。

②滞在期間が長くなるにつれて、中評価グループが内的場面での言語の切り替えを行っているのに対し、高評価グループは2言語併用のコミュニティの形成の方向と、ホスト言語コミュニティへの参加の方向に向かう意識を高めていることが明らかになった。

③一方で、出身地域での言語習得と現在の言語使用状況によるグループ間の言語使用意識を調べたところでは、単言語から2言語使用中心の外国人居住者の場合は、日本語の規範や習得に対する意識が強く、ホスト言語コミュニティに向かう言語管理を行う傾向があることが分かった。それに対し、単言語から多言語使用環境へ、また多言語環境から日本でも多言語使用環境を維持するA-2とB-2の言語使用グループの場合、滞在が長くなるにつれて、日本語習得を意識するよりは、自分らしい日本語の使用、言い換えると、多言語使用者としての言語環境を維持するための言語管理に向かう傾向があることが分かった。

(2) また、こうした各3つの言語使用グループに見られる外国人居住者の現在の言語使用意識をめぐる特徴は、移動や定住を繰り返

す中で、彼らが置かれてきた言語環境や言語習得、また彼ら自身による通時的言語管理によって形成されるものであることが、外国人居住者への言語バイオグラフィー調査から明らかになった。さらに、このような出身地域の言語環境と現在の言語環境という移動を時間軸とした通時的な分析は言語意識の変容をとらえることができるとともに、外国人居住者の日本語の習得に向かう意識の方向性を読み取ることができるといえる。

(3) 最後に、外国人居住者の接触場面における言語使用の分析においては、3つの言語使用グループにおいて異なる言語使用の特徴が見られていることが明らかになった。具体的には、A-1の2言語中心の言語使用グループの場合、発話文の種類において他のA-2とB-2の多言語使用グループに比べ、中途終了文の使用が少なく、発話文の種類にバリエーションが見られる。また発話開始表現の使用においても他の多言語使用グループに比べ、使用頻度が高く、その表現形式にもバリエーションが見られた。さらに、A-1の場合、言語使用における逸脱を否定的に評価しており、ホスト言語コミュニティに向かう管理を実際の言語使用においても見られた。一方、多言語使用グループの場合、文末の処理がパターン化している傾向があり、中でもB-2の多言語使用者の場合、文末においてとくに特定の表現形式を過剰に使用する傾向も見られた。また言い淀みや発話調整のためのフィラーの使用も2言語中心の言語使用者に比べ、どちらの多言語使用グループも2倍以上多く見られた。この結果から多言語使用グループの場合、日本語習得においてはホスト言語コミュニティに向かう調整をする一方で、自分らしい日本語規範に基づく日本語使用の管理も行っていることが分かった。このように実際の談話においても上記の言語使用意識の傾向が現れており、言語使用グループ間の特徴を裏付けていると言える。

以上の考察を踏まえ、日本の外国人居住者の日本語習得と日本語教育を考える際には彼らの現在の言語使用意識とともに、そのような言語使用意識を形成する彼らの通時的管理にも注目する必要がある、多様な言語背景や言語管理をもつ彼らが向かう日本語習得の方向性を見据えた日本語教育の示唆が何より重要であると言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ①高民定(2016)「日本の外国人移住者の言語環境と日本語使用における言語管理-言語バイオグラフィーの通時的・共時的語りの分析を中心に-」『グローバル・コミュニケーション研究』4(特別号) 神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所、169-196
- ②高民定・村岡英裕(2016)「日本の外国人居住者のコミュニケーションの実態調査の中間報告2」『接触場面における相互行為の蓄積と評価』vol12、千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第292集、115-139
- ③村岡英裕・高民定(2016)「日本在住の移動する人々の言語使用意識-留学生の滞在期間と言語習慣に焦点を当てて-」『言語学研究 (Journal of Korean Association of Language Studies)』21-3 韓国言語研究学会、219-241
- ④高民定(2016)「中間言語としての終助詞の使用-接触場面における談話展開と相互行為から捉え直す」『日本文学』35-11、明治書院、58-69
- ⑤村岡英裕・高民定(2015)「日本の外国人居住者のコミュニケーションの実態調査の中間報告1」『接触場面における相互行為の蓄積と評価』vol12、千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第292集、125-145

- ⑥高民定(2014)「日本の韓国人外国人居住者の言語習慣に向かう評価-語りに見られる通時的管理との関わりから-」『接触場面における言語使用と言語態度-接触場面の言語管理研究』Vol.11、千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第278集、131-144
- ⑦村岡英裕(2016)「言語使用の評価を通してみる習慣化された言語管理の軌道-言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近性をめぐって」『グローバル・コミュニケーション研究』4(特別号) 神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所、141-168
- ⑧村岡英裕(2016)「移動する人々の言語レパートリーに関する研究ノート-日本語の自己評価の語りはどのように形成されているか」『接触場面における儀礼的相互行為』Vol14、千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書309集、62-82

[学会発表] (計5件)

- ①高民定(2016)「日本の外国人居住者の言語環境と言語管理-日本語使用意識に関する質的調査を通して-」『2016年韓国言語研究学会冬季学術大会』韓国言語研究学会(2016.12.10. 済州大学)
- ②高民定「日本の外国人居住者の言語環境と日本語使用意識に見られる通時的管理-言語バイオグラフィー・インタビューの調査報告を中心に-」『2016日本語教育国際研究大会口頭発表』(2016.9.9インドネシア・バリ)
- ③高民定・村岡英裕(2016)「外国人居住者の日本語使用に対する当事者評価-単言語出身者と多言語使用地域出身者の言語習慣との関わりを中心に-」『社会言語科学会第37大会口頭研究発表』社会言語科学会(2016.3.20日本大学)
- ④高民定(2016)「日本における外国人居住者の言語使用と言語管理：外国人居住者の言語環境と日本語使用に対する通時的評価：言語バイオグラフィーのケース・スタディーから」

『2016年言語管理研究会』（2016.1.23千葉大学）

⑤高民定(2016)日本の外国人移住者の接触場
面に向かう言語管理-言語バイオグラフィー
からの通時的・共時的分析の試みー『第17回
ひと・ことばフォーラム研究会』（2016.3.12
東洋大学）

〔図書〕（計1件）

村岡英裕・ファン・サウクエン・高民定(共
編) (2016)『接触場面の言語学-母語話者・非
母語話者から多言語使用者へ』ココ出版

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

高 民定 (MINJEONG KO)

千葉大学、国際教養学部、准教授

研究者番号：30400807

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

村岡英裕 (HIDEHIRO MURAOKA)

千葉大学、国際教養学部、教授

研究者番号：30271034

(4)研究協力者

()